

令和元年6月21日現在

機関番号：13401

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2016～2018

課題番号：16K04674

研究課題名（和文）小・中学校教師の「見取り」と「インターベンション」の質的向上に関する実証的研究

研究課題名（英文）Practical Study of Improving for teacher's observation and intervention.

研究代表者

松友 一雄（MATSUTOMO, KAZUO）

福井大学・学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）・准教授

研究者番号：90324136

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：日々の授業を支える教師の授業実践力の核として、「教師の見取り」の質的向上と「教師のインターベンション」の量的・質的向上を実現するための教員研修の開発を目指してきた本研究は、以下の点が実現できたと考える。

授業を実践した教師に行ったインタビューなどを通し、教師の「見取り」と「インターベンション」の相関性を、教師歴や専門教科などのフレームによって分類分析し、教師の実践的力量的形成に関する観点を抽出することができた。学校単位で継続的に授業力向上のための研修に関わることで、個々の教員の意識や理解の変容に加え、実際の授業における「見取りとインターベンション」の変容をとらえることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日々の授業における教師の「見取り」と「インターベンション」は対話的で学習効果の高い授業を行うために必要な授業力の核となる部分である。本研究では、この授業力の核となる教師の「見取り」と「インターベンション」の質を支える要素を明らかにし、質的向上に向けた教員研修を開発した。

研究成果の概要（英文）：Teacher's observation and intervention are core of teacher's practical ability of making daily class. We realized to improve teacher's training for progress of observation and intervention in their class.

Through interviews with teachers who have practiced classes, the correlation between teacher's "observation" and "intervention" is classified and analyzed based on the frame of teacher's history, specialized subject, etc., and the viewpoint on formation of teacher's practical ability could be extracted. In addition to the change in the awareness and understanding of the individual teachers, I was able to capture the change in "observation and interventions" in actual classes by continuously engaging in training for improving the teaching ability on a school-by-school basis.

研究分野：国語科教育学

キーワード：見取り インターベンション 即時的評価 教員研修 授業力

1. 研究開始当初の背景

現在の小・中学習指導要領では「各教科による言語活動の充実」の必要性が示され、全教科において学習者が意見を交わし、説明・発表し合う場面が積極的に導入されている。このような主体的かつ協働性の高い授業の中では、学習者がただ話し合うだけでなく質の高い言語活動を行うために教師の効果的な働きかけが不可欠となる。そして、その働きかけの根幹となるのは、学習者の学習状況を丁寧に見とった適切な介入（インターベンション）である。

授業における教師のコミュニケーションに関する研究はきわめて多いが、近年ではとくに教師の意識的な「働きかけ」が児童・生徒に及ぼす影響に関する研究が進められている。たとえば、発言する児童に対して他者に向けて話すよう促す教師の介入の効果(磯村他 2005)や、教師が児童の発言をフィードバックする際の「リヴォイシング」(再声化)の有効性の検証(一柳 2009)はその代表である。さらに、理科の実験場面での「トランザクティブ・ディスカッション」(自身の考えを明確にし、相手の認識や推論のしかたに働きかけ、相手の思考を深めるような相互作用)においてこの「リヴォイシング」の有効性を検証した研究では、明確化 再解釈化 再定式化という効果をもつことが明らかとなっている(高垣ら 2006)。

2. 研究の目的

研究代表者は、上述した「リヴォイシング」をあくまでも教師の介入技術の1つと捉え、教師の教育観や教科の学力に関する知識を背景とした「見取り」を起点にし、ゴールを意識した教師の介入（インターベンション）を長期的・計画的な教授行為として位置づけた研究を展開している。

例えば、学習活動の中で教師が長期的な見通しをもって、学習者や学習集団の学習状況を「見取り」、即時的にコミュニケーションする技術として言語・非言語的介入(インターベンション)の効果を明らかにし、その類型化を試みてきた(松友・大和 2012)。その結果、「学習者を学習に誘う」や「学習者相互をつなぐ」等といった主体的で協働的な学習場面を生み出すための介入と「学習者の発話を整える」や「優れた学習者の方法知を取り出して共有する」といった学習者の学力を育成するための介入の効果を明らかにしている。また、学習者の学齢や学習状況に応じた介入技術の効果を明らかにするための基礎研究として、低学年の授業におけるインターベンションの共通性や効果を分析している(大和・松友 2013)。

さらに、この「インターベンション」は、学習者主体の協働性の高い授業を追求する現在の教師の授業実践力の根幹として位置づくものであるが、その起点となる「見取り」の質が、その後の介入に深く関係しているため、単に技術のみを模倣するのでは教師個人々の授業実践力は向上しない。「見取り」の質を向上させるための各教科の教育内容や学力に関する理解を深めるための教員研修に加えて、実際の自己の授業における「インターベンション」をカンファレンスによって対象化していく研修など、長期的かつ体系的な研修プログラムの開発が必要である。(大和、松友 2014、松友 2015)

3. 研究の方法

本研究では、基礎調査として、平成 28 年度中に実際の小・中学校の授業の中から効果的な「インターベンション」を抽出し、その起点となっている「見取り」の内実を授業者へのインタビューを通して明らかにするとともに、学習者への効果を分析することを通して「インターベンション」そのものの類型化を行った。

並行して、これまでの研究成果に基づいて作成した教員研修プログラム（インターベンションの基礎と見取りの質向上を目指した研修プログラム、インターベンション技術の向上を目指した授業カンファレンス）に新たに得られた知見を追加し、免許更新講習や学校支援、その他各種研修の機会において実際に研修を行いながら、その効果について検証を加えた。

・基礎調査 A 教師のインターベンションの類型化

調査対象校

永平寺町志比小学校・金沢市鳴和中学校・高槻市第七中学校

調査方法

ビデオカメラ 3 台による多方向からの記録（教師・学習者・教室全体）

分析方法

授業過程における教師と学習者のコミュニケーション場面に焦点をあて、教師の言語・非言語的介入の特徴を抽出する。

その後の授業過程における学習者個人・学級集団内での「言語活動」を抽出し、で抽出したコミュニケーションの影響要因を分析する。

さらに、教科・学習課題・学習内容・言語活動の種類といった授業の構成要素を基準に、複数の授業データの分析を進め、これらの構成要素との関係性を基準に、教師のインターベンションの機能と効果について明らかにする。

授業データの中から特に典型的な事例に焦点化し、その授業データを継続的に収集する。そ

して、教師個人のインターベンションの傾向を抽出しながら、その傾向や学習者個人・学習集団の「言語力」の向上との関係性を捉え、インターベンションの長期的な機能について分析した。

基礎調査 B 教師の「見取り」の抽出と類型化

調査対象校

高槻市三箇牧小学校・永平寺町松岡小学校・かほく市河北台中学校

調査方法

効果的なインターベンション場面の抽出と授業者へのインタビュー

分析方法

授業において効果のあったインターベンション場면을抽出し、その起点となる「見取り」について授業者にインタビューする。

その後、見取りの対象や背景となる知識など見取りの質を支える教師の知識理解などとの関係性を観点に分析を加える。

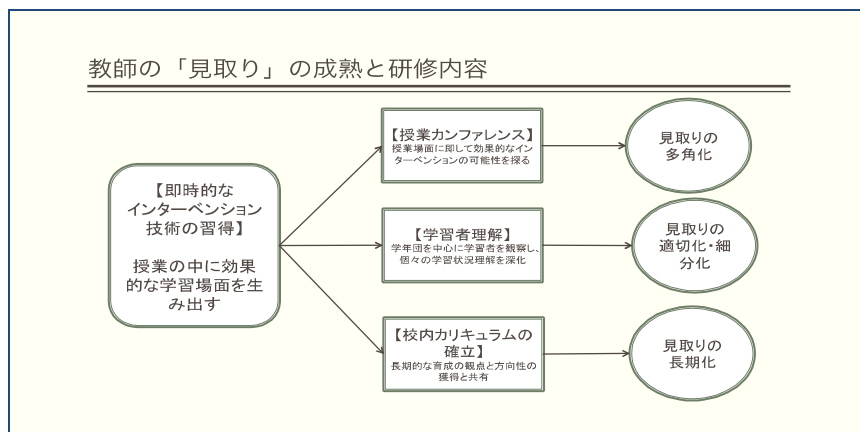
さらに、学習課題・学習内容・言語活動の種類といった授業の構成要素を基準に、インターベンションやその効果との関係性を観点に分析を進め、「見取り」とインターベンションの機能と効果について明らかにした。

・ 教員研修の開発について

教員研修プログラムの開発の方向性

1 教師の「見取り」の質の向上を目指した研修プログラム

教師の「見取り」の質を向上させるための研修としては、教科の学習内容に関する理解を深める講義型の研修に加えて、以下の三つの学校内での研修を実施し、その効果を検証した。



2 教師の「インターベンション」の質の向上を目指した研修プログラム

教師個々人の日々の授業を対象にしたカンファレンス型の研修を中心に、効果や場면을基準に類型化された「インターベンション」を映像で視聴し、協働で事例研究を行うラウンドテーブル型の研修を組み合わせ、実際の教師の「インターベンション」の質的変容を抽出し、研修の効果を検証した。

また、教員研修の開発に関しては、教員側の要因（専門とする教科、年齢、性別、学校の規模）に対応した形での研修の多様化を進めるとともに、研修機会の創出につとめるとともに、授業力の向上と関係付けて、授業力レベルの指標として本研究の知見を援用し、教師の授業力のレベルを分かりやすく可視化する研究を進めてきた。

4 . 研究成果

日々の授業を支える教師の授業実践力の核として、「教師の見取り」の質的向上と「教師のインターベンション」の量的・質的向上を実現するための教員研修の開発を目指してきた本研究は、3年間の研究の結果として以下の点が実現できたと考える。

基礎調査として小中学校での授業実践事例の収集を進め、それに対する分析から「教師のインターベンション」の類型を目的や学齢に応じて抽出整理した。

授業カンファレンスを通して、授業を实践した教師に行ったインタビューなどを分析し、教師の「見取り」と「インターベンション」の相関性を、教師歴や専門教科などのフレームによって分類分析し、教師の実践的力量的の形成に関する観点を抽出することができた。

授業実践事例の分析を通して、「教師のインターベンション」の「言語的介入」と「非言語的介入」の関係性を授業場面や学習内容の観点から類型化し、その効果と関係性に関する知見を得ることができた。

授業カンファレンスを通して学校単位で継続的に授業力向上のための研修に関わることで、個々の教員の意識や理解の変容に加え、実際の授業における「見取りとインターベンション」の変容をとらえることができた。この実態に基づいて、教師個人の日々の授業と一緒に向き合いながら、教師の「見取り」や「インターベンション」の質的向上を図るために効果的な授業カンファレンスの頻度や方法を明らかにすることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

松友一雄、大和真希子『高等学校文学の授業における「見取り」と「インターベンション」の類型に関する研究 - 『山月記』の授業を対象に - 』『福井大学教育実践研究』第43号、2018年、pp1-10、査読有

大和真希子、松友一雄「教師のインターベンションを支える「見取り」と「解釈」に関する研究：小学校国語科の授業分析を通して」『福井大学教育・人文社会系部門紀要 第2巻』2017、pp225-242、査読有

〔学会発表〕(計2件)

大和真希子、松友一雄「学習の高度化を支える教師の力量形成に関する研究—中学校での授業分析を通して—」日本教師教育学会(2018.9.30)

松友一雄、大和真希子「学力観とインターベンションの相関性に関する研究」日本教師教育学会(2016.9.18)

〔図書〕(計1件)

松友一雄「国語科の授業作りと評価を考える- 教師の「見取り」とインターベンション」、『公開講座ブックレット7 国語の授業作りと評価を考える』全国大学国語教育学会編、2018年、pp61-70

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：大和 真希子

ローマ字氏名：Makiko Yamato

所属研究機関名：福井大学

部局名：学術研究院教育・人文社会系部門（教員養成）

職名：准教授

研究者番号（8桁）：60555879

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。